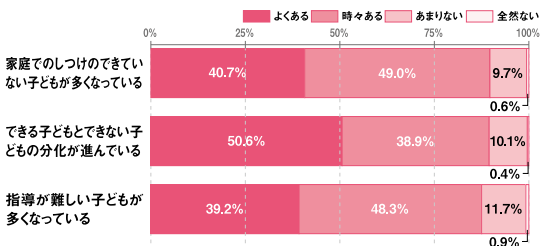


現在教えている子どもについて感じること(一部抜粋)



※この他、7項目については中央教育研究所のHPを参照

# 「家庭でのしつけのできていない子どもが多くなっている」 小・中教員の意識調査にみる現代の子どもの特性

公益財団法人中央教育研究所が「教育改革に関する教員の意識調査―小学校・中学校を対象に―」の結果をウェブサイトで公開している。調査は全国の小・中学校の教師を対象に201

4年10月に実施され、1020名から回答を得た。

まず、「現在、教えている子どもについて、次のように感じることはあるか」との問いに対する10項目の回答をみると、「よくある」

「土」時々ある」が高い順で、「家庭でのしつけのできていない子どもが多くなっている」(89.7%)、「できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる」(89.5%)、「指導が難しい子どもが多くなっている」(87.5%)だった。

「土」時々ある」という対照的なとらえ方に加え、「主体性・積極性の欠如」「忍耐力・耐性の欠如」など、『○○の欠如』というとらえ方の三つに分類された。

さらに、自由記述をみると、「子どもは子どもで変わっていない」「子どもたちは多い」「子どもたちは多様化し、格差が拡大し

こうした教師の意識について、中央教育研究所教科書研究会研究代表の武内清上智大学名誉教授は「子どもに対する見方は、親と教師では異なることがあります。親から見ると活発で好奇心の強い子が、教師には落ち着きがなくわがままと思われる場合もある。親は子どもの個性を伸ばそうとし、教師は学級の秩序を保とうとします。そうした見方も今回の結果に関連しているとも考えられます」と語る。

一方、「総合的な学習の時間」の導入による子どもの変化については、「子どもの地域に関する関心が高まった」とする回答が76.2%と最も高く、次いで「友達と協力して調べたり、発表したりするようになり、友達関係が密になった」が67.6%と、教師は前向きな変化を感じていた。